『energy対話』エッソ・スタンダード石油　1975年

当財団の「アドミュージアム東京」に所蔵された多彩なPR誌から、今回はエッソ・スタンダード石油の『energy対話』をピックアップ。どのように企業の個性を表し、時代を捉えているかを探る。

より深化した『energy』

『energy 対話』は、これまでのPR誌『energy』が抱えていた問題意識をさらに深めるために編集方針を対談を軸としたものに変更し、同時に誌名と体裁も一新されました。

1975(昭和50)年5月に発行された第1号の編集後記には、以下のように記されています。

「本誌が対談という形式を可能な限り追求してみることにより、日本語の話し言葉を文字化する、という大きな課題に寄与できればと考えている」

第１号のテーマ「詩の誕生」を見てみましょう。対話者は、大岡信と谷川俊太郎です。

その中の「詩の社会的な生き死に」において、以下の対話がなされています。

谷川　詩が社会的に死ぬってことは、その時代の大多数の人間がそういう詩を感ずる能力を失っているということかね。
大岡　一つはそうだと思う。もう一つは、逆にそれがあまりにも深く人びとの生活習慣のなかに入り込んでしまって、そのなかで生きているのに自覚されなくなった状態というのがあるだろうね。

このような対話の運びに編集者の狙いがよく表れていると思います。大岡信と谷川俊太郎の対話は、詩作の実体験に基づいて言葉やコミュニケーションに関する鋭い観察と見識に満ち、刺激的です。肉声が伝わり、話し言葉のリズムが会話の臨場感を感じさせ、その場に立ち会っているような弾んだ気分にさせてくれます。確かに書き言葉で記された文章とは違った読書体験です。

『energy 対話』の表紙。左：第1号でテーマは「詩の誕生」、対話者が大岡信×谷川俊太郎。　中：第3号でテーマは「絵の言葉」、対話者が高階秀爾と小松左京。右：第4号でテーマは「音楽の世界図」、対話者が團伊玖磨×小泉文夫

巻末に、アンケート「詩の誕生を考える」に寄せられた56人の有識者の回答が掲載されています。

質問項目は、①推薦する本・論文・エッセイ②好きな詩・詩集③自分の詩的原体験の３つです。その中で、作家・石牟礼道子は、③の詩的原体験については、「魂が入り始めたころ，秋の山の畠に寝っころがされていて、(母が畠をやっていたので)萩や女郎花の咲きしだれる下から、光る空を見ていたこと。漂う花粉にあらわされる山野の華やぎの意味、いのちの意味をほとんど官能で、わかりかけた赤子体験のふしぎ。」と記しています。

また、作家・澁澤龍彦の同じ③の回答を、「毎日のごとく、日常茶飯に体験しております。詩的な原体験というのは、意味が分りません。私の考えでは、体験というものは、すべて原体験であります。原点とか、原風景とか、原体験とかいった流行の言葉は、いやな言葉です。詩的とは言えませんね。」と記し、本人の性格がにじみ出ているようです。

編集後記は、次の言葉で締めくくられています。「この号は二人のすぐれた詩人が『詩の誕生』という主題を、人間のコミュニケーションの根源にかかわる問題として、合計10時間にわたって語り合ったものです。……両氏の詩作体験に根ざした鋭い洞察は、たとえば言葉についても、言葉がたんなる情報伝達の道具であることを超えた側面をつねにとらえていて、そこを出発点とする様々な問題への探索は、われわれに多くのものを示していると思われます」。

この１冊は詩という、現代においてマイナーと思われがちなテーマを取り上げながら、それが今日の社会の広い問題に関わる大事な事柄であることをわからせてくれます。何度も読み返すべき内容だと感じます。

自由な対話から生まれる刺激的なコンテンツ

1975年12月発行の第3号「絵の言葉」を見てみましょう。対話者は高階秀爾と小松左京です。

第１部「絵は言葉である」では、このような対話が行われます。

小松　江戸時代を見ても、原作者より浮世絵師の地位のほうが高い『絵主文従』

Yoshiro Okada
1934年東京都生まれ。早稲田大学政治経済学部卒業。56年電通入社。
コーポレートアイデンティティ室長などを経て98年退職。70年の大阪万博では、
「笑いのパビリオン」を企画。80年代は電通のCIビジネスで指導的役割を果たす。
著書に『社会と語る企業』（電通）、『世界一の映画館と日本一のフランス料理店を
山形県酒田につくった男はなぜ忘れ去られたのか』（講談社）など。

の時代があった。それが江戸末期から、とくに明治になると、『文主絵従』に変わっていく。現代においても『絵主文従』になっているのは映画ですよ。シナリオライターは監督にくらべて、まだまだ地位が低いわけです。しかし一般に印刷媒体の世界では、全体としてみて絵の地位は非常に低い。そういうふうな、アイコン（画像）とリテラチュア（文字）との角逐の歴史というのは、どの社会でもずっと辿れるはずですね。

高階　非常に古い時代にはどこでもアイコンが先行していたと思いますね。象形文字にみられるように、文字というものは原則として形から出てきているのですから、美術というのは、文字による歴史よりはずっと古いわけです。

第２部「絵に文法と辞書がある」では、このような対話が行われます。

高階　……芸術はコミュニケーションの手段であると同時に、それがすべてではなくて、ほかの要素も含んでいます。しかし、そのコミュニケーションをより有効にするために、余計なものをくっつけるという面がずいぶんあると思う。

小松　まさに「イラスト」するわけだ。中国の詩の場合も、自分の言いたいことをじかに言うかわりに上手な詩につくると、それが皇帝の目にとまって、そこで振り返ってくれるという機能を持っている。アイキャッチャーみたいなものです。

高階　芸術にとって、それがかなり本質的なものですね。一見余計なものと思えるもので、いったん目をとらえてしまえば、ついでに心までとらえる。それを西洋の美学は信じていたということです。そうでなきゃあんな面倒なアレゴリーを考えたり、あんなに苦労して天井を装飾するということは考えられない。

第３部「絵と自然のつながりを読む」では、このような対話が行われます。

高階　……産業革命が人間の生活環境を大きく変えてしまって、近代都市とか機械とか工場、集団住宅とか鉄道という、人工的な環境が出現したわけですね。そのなかで生命的なものを蘇らせようという意図が、アール・ヌーヴォにあったんだろうな。機械というのは合理的で、幾何学的な形で割り切れるものだから、割り切れない形へ向かうということで生命力の復活を求めたんだろうと思いますね。

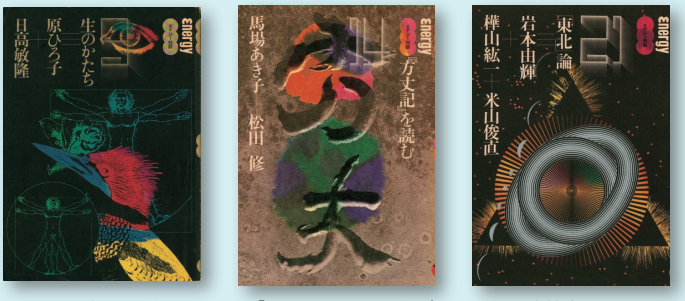
小松　とくに曲線を重視したというのは、そういうことでしょうね。

博覧強記の2人の対話は古今東西の拡がりを持ち、絵を中心にしながら文化やイメージ・コミュニケーションを考察します。

『energy 対話』は、2人の知識人が徹底してテーマについて語り合う長編対話の形式をとっていました。編集長の高田宏は、「この対話は、従来なかった新しい表現形式を生むことができ、自分自身も対話者の思考に触れ、速記録から原稿にまとめる作業を通して、得難い思考トレーニングを受けた」と後に語っています。PR誌はここまできたのだ、と感慨深い思いです。

Column

『energy 対話』の背景



左から、第9号でテーマ「生のかたち」、対話者が原ひろこ×日高敏隆。
第14号でテーマ「『方丈記』を読む」、対話者は馬場あき子×松田修。
第21号でテーマ「『東北』論」対話者が岩本由輝×樺山紘一×米山俊直

『energy対話』は、1975年から1982年にかけて21冊が刊行されました。創刊2年前の1973年にはオイルショックが起こり、経済界全体に縮小が迫られます。広報誌予算も大幅な削減を迫られる中、エッソ・スタンダード石油のPR誌もページ数を半減させるか発行回数を減らすか、の選択を迫られます。編集長の高田宏は、これを好機と捉え、テーマを掘り下げ、じっくりと時間をかけて編集を行う年3回発行の新しい雑誌の発行に至りました。なお、当時、他に先がけて安価な再生紙を用いたことも、マスコミに注目されました。